

青少年教育指導者等の研修事業

「大阿蘇ボランティア学習塾」

- [主催] 国立阿蘇青少年交流の家
 [後援] 九州各県・政令指定都市教育委員会
 [期間] 平成21年7月11日(土)～12日(日) 1泊2日
 [会場] 国立阿蘇青少年交流の家

- [参加状況] 46名
 高校生 21名
 大学生 13名
 一般 12名

- [講師] 講義「私が変わる 社会は変わる」
 「ボランティアのすすめ」

日本ボランティア学習協会 代表理事 興梠 寛 氏
 財団法人熊本市国際交流振興事業団 事務局次長 八木 浩光 氏



講義の中での発表の様子

1 趣 旨

青少年教育施設におけるボランティア活動の基礎を培うとともに、地域社会のために自ら行動し、貢献する人材育成のきっかけ作りを行う。

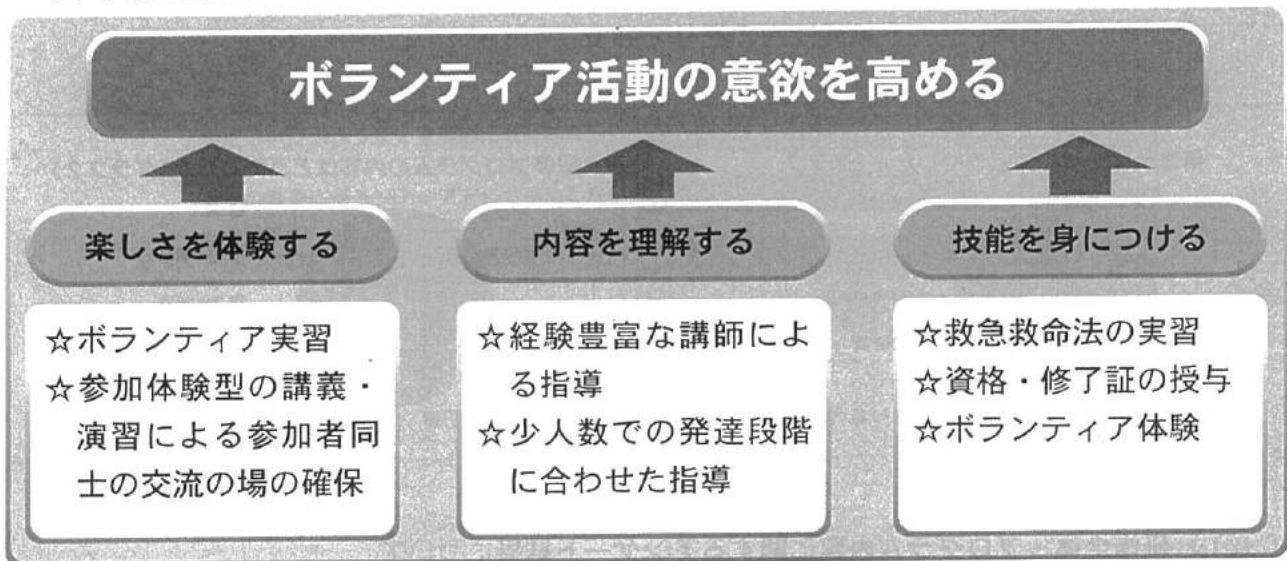
2 目 標

「社会の役に立つ」という奉仕の心を育てるとともに、ボランティア活動の意欲を高める。

3 事業の実際

(1) 研修プログラム

目 程	午 前	午 後	夜
7/11 (土)	○開会式 ○講義・演習 「私が変わる 社会が変わる」	○講義「これからの教育施設 に必要なことは」 ○講義「ボランティアのすす め」	○実習「おいしい!楽しい! ピザづくり」
7/12 (日)	○実習 「いざというときのために」	○講義「青少年教育施設で何 ができる!?!」 ○閉会式	



(2) 目標達成のための工夫点

① 実習や演習を多く取り入れた参加体験型のプログラム展開

実際の場面で使える技術やボランティアの楽しさを実際に体験することで、ボランティアへの意欲を高め資質の向上を図りたいと考えた。そこで、参加体験型の活動を行うことで参加者同士のコミュニケーションが取りやすいと考え、地域の子ども会と共同で行うピザ作りをプログラムに取り入れた。その際、子どもたちと実際にふれあいながら施設の活動プログラムを行うことで、本施設の取り組みを体験し、ボランティアを行う上での楽しさや喜びを感じることができるよう工夫した。また、高校生や大学生など、これから就職する青年が多く参加することもあり、救急救命法の実習を取り入れ、安全管理という視点も含め、消防署員の方に指導を依頼した。終了後は救急救命法の修了証が発行されることから、今後のボランティア活動へつながるようにした。



子どもたちとピザ作りを行う参加者

② ボランティア活動の理解を深める工夫

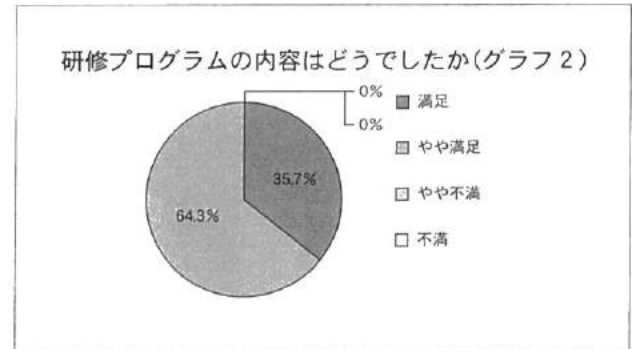
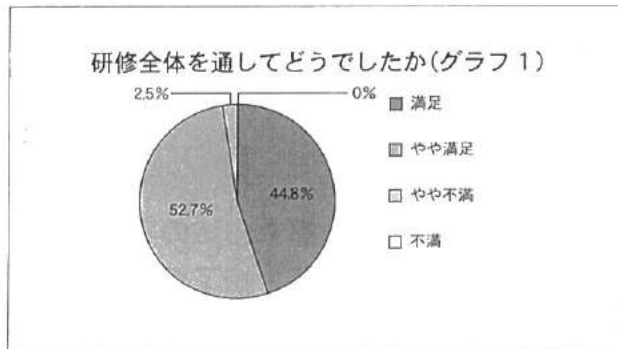
ボランティア活動を自主的に行った経験のない参加者も多くいると考えられたので、活動の意義や重要性をしっかりと理解できるように、自らもボランティアを実践し、豊富な体験や経験をもつ講師に指導を依頼した。また、講義では、自らの実践や外国の様子などを交じえ、広い視野に立って講義していただくことでボランティア活動の理解を深め、意欲を向上させると考えた。さらに、高校生と大学生・一般をそれぞれ別の部屋に分けて講義を行い、実態に応じた講義をしていただくことで、内容を焦点化することができると同時に、少人数での指導ができ、講義の中に組み込まれた演習に一人一人が積極的に参加できるようにした。



興侶氏による講義の様子

4 結果

参加者からのアンケート結果は次の通りである。



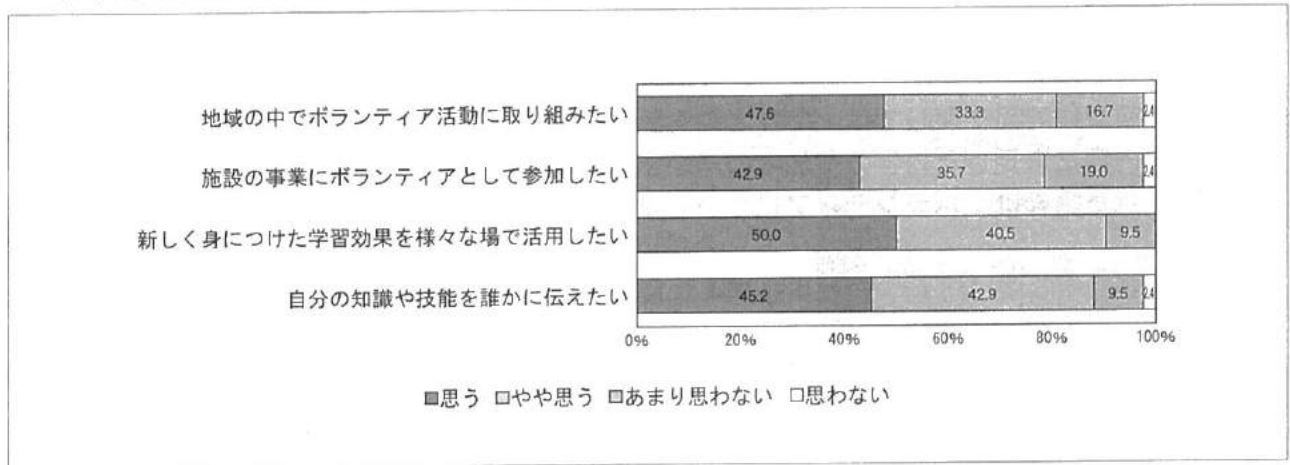
(1) 研修全体・プログラム内容に関するアンケート結果について

〈研修内容に関する参加者の記述〉

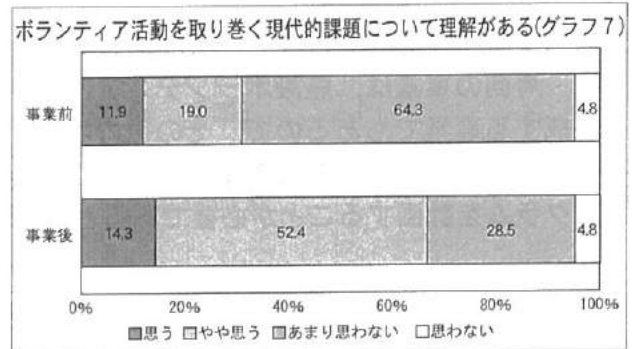
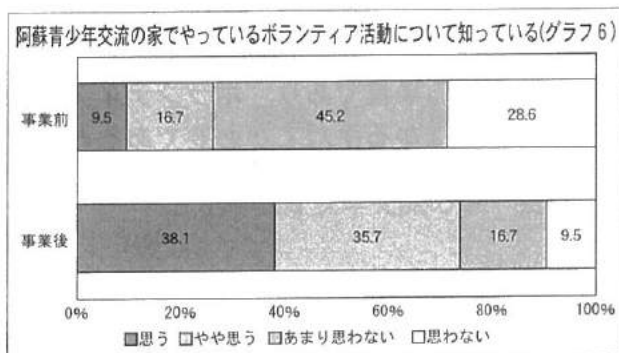
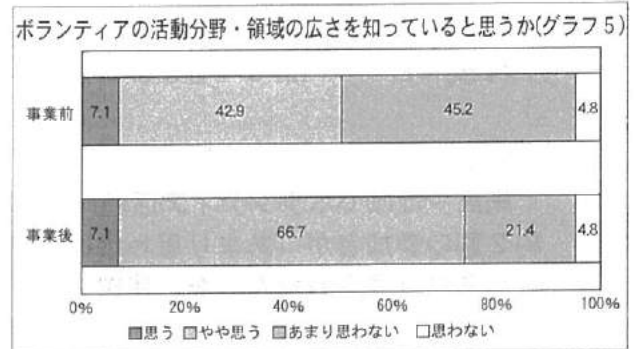
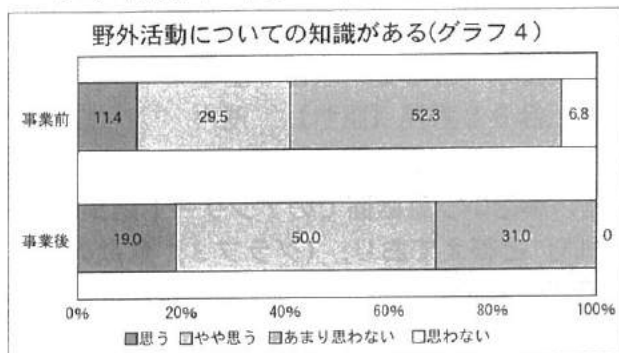
- 子どもとふれあう機会があり、実践も含めてさまざまなことを学ぶことができた。
- 先生の講義がボランティアに限らず、人生に関する話として、とても感動した。
- さまざまな年代の人がいてよかった。参加者間の交流が充実していて楽しかった。
- 救急救命法の技術などたくさん学ぶことができてよかった。これからもっとボランティアについて深く学びたいと感じた。
- 野外での活動をもっと取り入れてほしかった。
- 時間にゆとりがなく、慌ただしさを感じた。



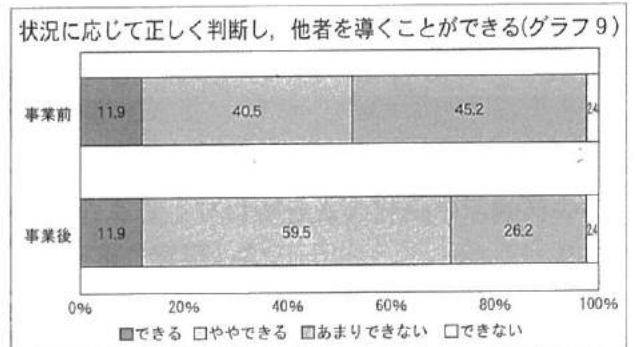
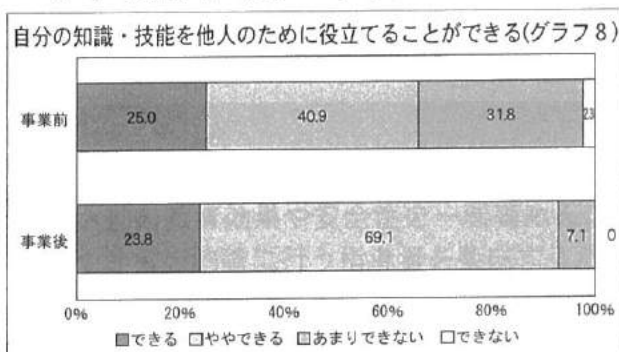
(2) 意欲面に関するアンケートの結果について(グラフ3)



(3) 知識面に関する事業前後のアンケート結果の比較について



(4) 技能面に関する事業前後のアンケート結果の比較について



5 成果と課題

(1) 成果

- ① 事業前後のアンケート結果（グラフ4～9）をみると、ボランティア活動に関する知識面や技能面に関しては、参加者の意識に伸びが見られた。経験豊富な講師による講義の内容に満足した内容の参加者の声が多く、発達段階に合わせた少人数での演習を取り入れた講義は、ボランティアについて学ぶという観点である程度の効果があったと考える。
- ② 「新しく身につけた学習効果を様々な場で活用したい」という項目では参加者の9割が「思う」「やや思う」と答えており、（グラフ3）今後のボランティア活動への意欲の高まりがあったと考える。
- ③ 研修プログラムに関する満足度は100%であり、（グラフ2）実習として救急救命法の実習を取り入れたり、地域子ども会と共にピザ作りを行ったりしたことで、「様々なことを学ぶことができた」などのアンケート記述がみられることから、プログラムの満足度につながっていると推測される。



(2) 課題

施設や地域でボランティア活動に取り組みたいかという意欲面でのアンケート結果では、約2割の参加者が「あまり思わない」「思わない」と答えており、（グラフ3）意欲の高まりがあまり見られなかった。原因としては、施設や地域のボランティア活動に関する知識や技能を今回の事業ではあまり習得することができなかったことが考えられる。

6 まとめ

今回の事業は、施設ボランティアとしての資格を付与する事業であり、ボランティアを育成する事業でもあるので、その後のボランティア活動につながる手だてが必要であると感じる。今後は、1泊2日の事業にこだわることなく、実践的に取り組むことができる研修プログラムを計画することが必要であると考えられる。